

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

弘田龍太郎研究

－故郷 安芸市を訪ねて－

The Study of Ryutaro Hirota “A report on the visiting his home town, Aki-shi”

秋 山 真 理 子
田 中 誠

弘田龍太郎研究

－故郷 安芸市を訪ねて－

The Study of Ryutaro Hirota

“A report on the visiting his home town, Aki-shi”

秋 山 真理子 (幼児教育学科)

AKIYAMA Mariko

田 中 誠 (幼児教育学科)

TANAKA Makoto

抄録

本稿は、大正時代の「赤い鳥」童謡運動の担い手の一人である、作曲家弘田龍太郎の背景にある、生まれ故郷の高知県安芸市を訪ねたものである。地元の「童謡の里づくり運動」の一つである童謡曲碑を中心に、弘田に所縁あるものの調査・取材を行い、安芸の歴史・文化・風土が弘田にどのように影響を与え、地元の人々が弘田の童謡にどのような思いを抱いているのかを明らかにした。

キーワード：弘田龍太郎、童謡、安芸市、曲碑

I はじめに

弘田龍太郎（以下、弘田）は、大正時代の「赤い鳥」の童謡運動の担い手の一人である一方、歌曲やオペラの作曲家としても高名であり、ラジオの子どもの番組や合唱指導者としても活躍した。戦後は大学で教鞭をとる一方で娘夫婦とともに創設した幼稚園を中心にして、リズム遊びなどの幼児教育にも携わり、昭和27年に60年の生涯を終えた。弘田が創設したゆかり文化幼稚園は表現教育を特色とした幼稚園として現在に至っている。

弘田が生涯に作曲した童謡や歌曲、校歌等は千数百曲にも及ぶ。中でも、《靴が鳴る》《春よ来い》《金魚の昼寝》《すずめの学校》《叱られて》《雨》《お山のおさる》《鯉のぼり》《浜千鳥》《小諸なる古城のほとり》などは今でも親しまれ、歌い継がれている名曲である。

「赤い鳥」の童謡運動は、第一次大戦後東の間の大正デモクラシーの自由な社会情勢において、明治時代の唱歌に対抗する形で芽生えた。しかしながらその中で活躍した作曲家の多くは、関東大震災、世界大恐慌に端を発し、満州事変から太平洋戦争へと突き進んだ日本の20年に及ぶ軍国主義の時代に、自身の作曲家としての絶頂期や円熟期が重なり、芸術家とし

て重大な影響を蒙ったであろうことは想像に難くない。大空襲でほとんどの作品が消失してしまった作曲家や、戦時中の食糧難に健康を害して戦後間もなく（あるいは戦時中に）亡くなった作曲家、再び訪れた平和に希望を託しながらも突然この世を去った作曲家、あるいは、心ならずも軍国主義や戦意高揚に加担せざるを得なかった作曲家も多かったに違いない。弘田もまたこのような時代の影響を受けた一人ではないかと考えられる。弘田は、自由な文化の華開いたワイマール共和国時代のドイツ・ベルリンに留学して1年後、世界大恐慌の年に帰国した。その後東京音楽学校（現東京藝術大学）の教授に就くも作曲に専念したいという理由からわずか2か月で辞した。この時期は満州事変が起こり日本は軍国主義への道を歩んでいくことになる。昭和14年からは、作曲の傍らラジオのこども番組の指導や児童合唱団の指揮指導に当たっているが、この年に第2次世界大戦が勃発し、2年後に日本は太平洋戦争に突入していった。戦後は、大学・短大で教鞭を執ると同時に、幼稚園を創設し幼児教育に携わったが、5年目の昭和27年に病のため60歳で生涯を終えている。このように、「赤い鳥」以降の作曲家としての活動は戦時中と重なるため、生涯や業績についての資料が非常に乏しい。それだけに、弘田に対する興味・関心は作品に対するそれと同じように深く大きくなっている。

そのような状況において、大地（2012）は、弘田の幼児教育にかかわる音楽活動として、1）童謡の作曲 2）ラジオ放送における音楽教育の啓蒙への貢献 3）幼稚園の設立と幼児教育 という3点に焦点を当てた興味深い研究を行っている。

幼稚園の設立と幼児教育に関して、筆者は、平成28年5月から翌年5月まで5回にわたり、彼の設立したゆかり文化幼稚園を訪問し、園で行われている表現教育の素晴らしさを様々な場面で見ることができた。注（その報告は「就実教育実践研究第10巻」（2017）に「幼児期における表現教育」として掲載。）

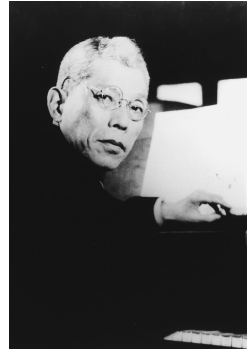
弘田家先祖代々の土地で、弘田が生まれ3歳までを過ごした高知県安芸市は、彼の業績を偲び、以下のような「童謡の里づくり運動（童謡の古里運動）」を昭和53年から始めている。

- 1）市内の名所や旧跡に曲碑の建立。昭和53年の《浜千鳥》から平成17年の《靴が鳴る》まで26年をかけ合計10基が設置された。
- 2）安芸童謡フェスティバルの開催。
- 3）弘田龍太郎ふるさと賞の創設。
- 4）童謡のシンボルマークの制定。
- 5）兵庫県たつの市との童謡で結ぶ姉妹都市の締結。

筆者は、平成29年早春に高知県安芸市と東京に赴き、童謡の曲碑を始め、弘田に所縁のあるものの調査・取材・収集を行った。そして弘田の足跡を辿り、彼の童謡作品が地元でどのように扱われ、そして地元根付いているのか、また、故郷の風土が弘田の人柄・作品にどのような影響を及ぼしたかを明らかにした。

Ⅱ 弘田龍太郎のプロフィール

弘田龍太郎（以下、弘田）は、明治25（1892）年6月30日、高知縣安藝郡土居村西木戸（現安芸市土居）に、教育者であり、また高知縣議會議長を務めた父・弘田正太郎、弦琴の名手であった母・総野との間に長男として生まれた。弘田の音楽的才能は母・総野から受け継いだといわれている。弘田3歳の頃、父・正太郎の転任に伴い安藝郡土居村を離れ、千葉師範学校附属小学校（現千葉大学教育学部附属小学校）に進み、更に三重県立第一中学校（現三重県立津高等学校）で学んだ。両旧制小・中学校への進学は父・正太郎が校長として栄転したためである。



弘田は、三重県立第一中学校を卒業後、明治43年、東京音楽学校（現東京藝術大学）器楽部ピアノ科に入学した。音楽学校在学中に歌曲「昼」を作曲。大正3（1914）年に卒業。同年11月には東京音楽学校の同級生で詩人・高安月郊の長女・百合子と結婚した。また、卒業と同時に母校の助手を勤めたが、大正6年、作曲部の新設にあわせて再入学し、その後、講師、助教授となる。

大正6年ごろから本格的な作曲活動が始まり、宮城道雄を中心とした新日本音楽運動に参加。琴・三味線を主体とした日本舞踊界に洋風の伴奏を取り入れるなどの斬新な活動を行った。また、若柳吉三郎（初代）の舞踊曲「柳」「姥捨山」「雪の幻想」や歌舞伎の尾上菊五郎（六代目）の舞踊曲「生贄」「刺客」を作曲、振り付けまでも指導し大好評を博した。その後、北原白秋を中心とした「赤い鳥」の童謡運動に参加し、多くの童謡や「小諸なる古城のほとり」「千曲川旅情の歌」を発表し、童謡・歌曲作曲家としての地位を確立した。昭和3年、文部省在外研究員としてドイツに留学し、ベルリン大学で作曲とピアノを研究。帰国後、母校の教授に任じられたが、作曲に専念するため2ヶ月で辞任。その後は、仏教音楽「仏陀三部作」、オペラ「西浦の神」などを発表し、高く評価された。昭和14年からは、作曲のかたわら、ラジオの子ども番組の指導や児童合唱団の指揮指導にあたった。

戦後は、幼稚園を設立、大学で教鞭をとる一方で幼児教育に携わり、放送、講習会、リズム遊びの指導にあたった。昭和27年、病のため東京の自宅にて永眠、60歳。

Ⅲ 弘田龍太郎の生まれ故郷、高知県安芸市・土居の歴史と風土

安芸市史の歴史編では、次のように記されている。

安芸市の集落は、安芸、東浜、西浜、黒鳥の地区から成り立ち、安芸川の右岸の砂丘状に発達した宿場町で早くから安芸郡の政治・文化の中心地であり、安芸川上流にある林産物の集積地として繁栄した。土居は土居、僧津の地区から成り立ち、中世には豪族安芸氏の「土

居」(屋敷地)のあったところで、その地名の由来である。安芸氏は安芸城主安芸元康が応仁の乱に参戦し死後、安芸家は備後守國虎へと継承された。安芸城は土塁を築き堀をめぐらし、外敵の侵入を防ぐ中世の豪族屋敷、すなわち「土居」から発展したものと記されている。

安芸氏滅亡後、天正15年(1587)9月から同18年にわたって長宗我部元親が土佐國全土の検地を領有した。しかし、関ヶ原の戦いで西軍に組みしたため除國され、これに代って土佐に封ぜられた山内一豊が慶長6年(1602)に入国した。山内氏は土佐藩内の政治的、経済的要地である安芸の土居に家老級であった五藤氏を配置した。家老五藤氏は代々土居の古城跡に住み、徳川300年の時代を藩の要職に就き務めあげた。

この土居は安芸文化の中心地となり、幕末の土居廓中は追手門前には弘小路、練兵場、素読所(学舎)、米蔵、菜園場などがあり、城の東側に馬場、これらを取り巻くように約40戸の武家屋敷が立ち並び、路地が碁盤目のように通り、東、西、北にある木戸に通じ、城の南側は上級武士、北側には下級武士が住んでいたようである。

寛政11年(1799)藩の家老五藤内蔵助が家臣を教育するために土居に秉彝(へいい)学舎を設立した。学舎の教科は大学、小学、中庸、孝経、易経などの漢籍や習字、算術などの実学が教授されて。独特の学風がつくられ、高知城東一番の格式高い学舎といわれた。藩政期における当地の庶民文化は、後期の塾や寺子屋の普及によってはじまり、なかでも岩崎泰助(硯山)が開いた家塾の秋香村舎の門下に岩崎弥太郎(東山)、や岩崎馬之助(秋溟)などの秀才が多く生まれた。特に秋溟は間崎滄浪(土佐勤王の志士)、細川潤次郎とともに三奇童といわれ、後に江戸へ遊学し安積良斎に学ぶなど、幾多の俊才が生まれた土地である。

高知県人名辞典には弘田の父、正郎(1852～1922)を次のように記している。

「教育者 嘉永5年2月、安藝郡土居村(安芸市土居)に市作、兼の長男として生まれた。弘田家は安芸の城主・五藤家の家臣を祖とし、市作は酒造と米穀売買を業とした。正郎は幼少時代土居の寺子屋(弘田三畏)で「読・書・算」を学び、併せて柔・剣・棒術などの武術の修練に励んだともいわれる。さらに高知城下に出、陽明学者・奥宮慥斎に師事し、漢文・東洋哲学を学んだ後上京した。その後米人カロザスに英語を学び、大阪の開成学校、慶應義塾で英学を修学した。明治9年には高知縣の命で東京師範学校中学師範科に入学。卒業後、徳島師範学校長、高知県立高知中学(現高知追手前高校)校長を歴任。一転して山形県西田川郡中学校長として招かれ、退職後は高知県議会議員となり、帝政党のリーダーとして活躍した。やがて高知県議を辞し、明治31年千葉師範学校、同35年三重県立第一中学校(現津高校)の各校長として教育界に復帰した。」

弘田が生まれた安芸市土居は文武両道を奨励し、師弟の教育に熱誠を興した処と思われる。土居の家塾からはじまり、やがては明治7・8年頃に小学校教員養成所が置かれ、明治12年1月には安芸中学校が設置され、同17年高知中学安芸分校と改称、やがては廃校となり、「弘田正郎氏等の凱旋し功ありて私立藝陽学校が誕生した。この時代は学校の経費は全く寄付金を以て成りしは有志の凱旋苦心の状まことに惨憺たるものあり、講師の如きも殆ど報酬を受

けずして犠牲的に奉仕せりと云ふ」と記されている。地域有志の熱誠により、明治33年4月高知県第一中学校分校として設置せられ同36年4月に独立して高知県立第三中学校となった。大正11年4月には校名を高知県立安芸中学校と改称された。同9年4月には、高知県立安芸高等女学校が誕生している。

弘田が生まれた安芸市及び土居村は、戦国時代の安芸家によって産業・経済・文化が発展し、藩政時代に土佐3大家老の一人、五藤為浄が土佐藩主山内一豊の命を受け、長宗我部元親滅亡後を安芸に入り、当地を取めた安芸氏に代わって土居村を中心に安芸の産業・経済・文化・教育に心血を注いだ。人物の輩出、特に教育に関しては一般庶民教育を奨励し多くの寺子屋が生まれ、前述した士族卒の子弟の教育機関として乗輿学舎（藩立学校に準ずるものにして尋常私塾を以て見る可からざるなり）が生まれた。現安芸市は戦国時代から紆余曲折の道を辿り産業の増進と経済の発展を計り商業経済を発展と同時に文武の教育に着手している。このような風土のなかから弘田龍太郎が輩出されたと云っても過言ではない。

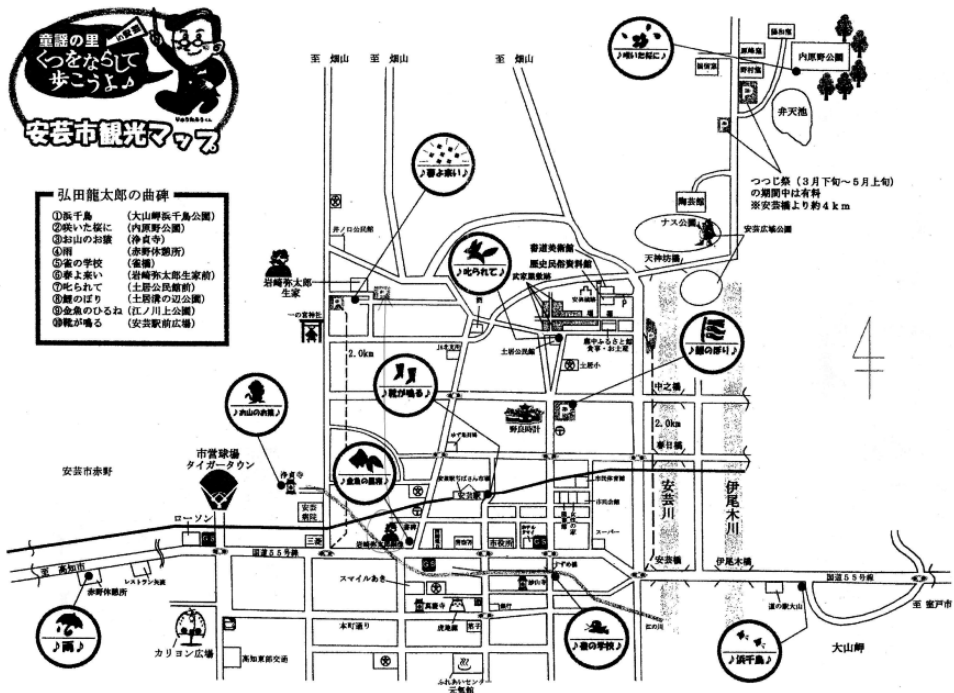
Ⅳ 弘田龍太郎の故郷、高知県安芸市を訪ねて

高知県安芸市は、弘田の業績を偲び、昭和53年から「童謡の里づくり運動（童謡の古里運動）」を始めている。そのうちの一つに市内の名所や旧跡に記念碑を建立するという活動があり、安芸市の観光案内やホームページなどで紹介されている。その記念碑は、弘田の広く歌われている童謡10曲を取り上げ、歌詞だけでなくメロディー譜を刻んだ「曲碑」と呼ばれる石碑であり、1つ1つが童謡のイメージに合わせた大変ユニークな形をしている。このような曲碑を全部で10基、約四半世紀もの長い期間をかけて安芸市の誇る名所や旧跡のそばに建立したのである（建立の順番は作曲順ではない）。他に例を見ないこうした地元の取り組みに大変興味をひかれ、幼年期の弘田に影響を与えたであろう安芸の歴史や風土への興味と相まって、自ら体験したいという思いに駆られ、平成29年早春に安芸を訪れたのである。

安芸駅は、土佐くろしお鉄道「ごめん・なはり線」にあり、駅には高知県出身の漫画家やなせたかし氏によって「童謡の里 安芸」に因んだ「あきうたちゃん」のキャラクターが描かれている。改札口には浜千鳥の曲碑と野良時計の写真が「ようこそ安芸へ」と出迎え、駅前の壁には、弘田の名前とその生涯をたどった多くの記録写真や、弘田の曲碑の説明や設置場所が記された観光案内が掲示されるなど、駅前には弘田龍太郎一色であった。

（１）曲碑を巡る

観光案内所の観光マップには、10基の童謡の曲碑が○で囲まれた絵で示されている。周りの名所旧跡とともに、建立された順を追って曲碑を巡った。



1) 浜千鳥：昭和53年建立。

記念すべき第1号曲碑は、太平洋を臨む大山岬の新旧国道の分岐点に建立され、周辺は「浜千鳥公園」(写1, 2)として整備された。波と波間を飛び交う浜千鳥を描いた曲碑の裏側には建設にあたって協力された当時の安芸市・観光協会・市民・青年会議所・ライオンズクラブの名前が刻まれている。題字と歌詞、弘田の略歴は、当時の観光協会会長石坂道雄氏書いた(写3)。書家でもある石坂氏は他の曲碑の大半を自ら書いている。浜千鳥公園には、地元出身の漫画家はらたいら氏による絵が描かれた水飲み



写真1, 2
浜千鳥公園と曲碑

場が設置され、地元の熱い思いが伝わる(写4)

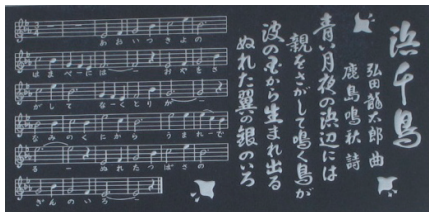


写真3 浜千鳥 曲碑



写真4 水飲み場

2) 咲いた桜に：つつじと弁天池で有名な内野原公園入口に昭和55年4月建立。

坂本竜馬の好んだ「どどいつ」を弘田が採譜した。近くに、高知アララギの歌人楠瀬兵五郎の歌碑がある。(写5, 6)



写真5 咲いた桜に 曲碑



写真6 弁天池

3) お山のお猿：浄貞寺（明応4（1495）年建立の安芸市有形文化財）（写7）の山門前に昭和56年6月建立（写8）。

豪族安芸家の菩提寺であり境内には安芸國虎の墓や安芸神社がある。



写真7 浄貞寺



写真8 お山のお猿 曲碑

4) 雨：安芸市の南西、国道沿いの赤野休憩所に昭和57年4月建立（写9）。

曲碑の文字は、国際障害者年のこの年に、辻典子氏が書いたものである（写10）。映画監督の松山善三氏は典子さんを主人公に映画を製作、曲碑の建立にも尽力された。曲碑には、「いくつもの美しい詩や曲を、弘田龍太郎出身のこの地に碑にきざみ、子どもたちのために永久に残したい」と、童謡の古里運動の趣旨が記されている。



写真9 雨 曲碑

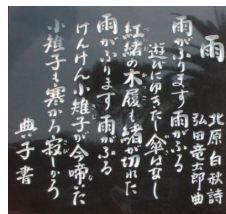


写真10 辻典子書

5) 雀の学校：土居橋（通称すずめ橋）に昭和58年8月建立（写11）。

竹林の背景の上に詩が書かれ、欄干には雀の描かれたタイルが貼ってある。橋の向こう側には、弘田の《三日月》の曲碑が書かれ、別の側には弘田の童謡・小曲選集の表紙を飾った竹久夢二の絵が描かれている（写12）。この川に鯉を放流する運動が、かつ



写真11 雀の学校 曲碑



写真12 竹久夢二画

て観光協会の石坂氏が中心となって行われた。通りかかった老婦人から弘田が地元の出身であることをご存じで、ご自身も市民合唱団で弘田の童謡を歌っているという話を聞くことができた。

6) 春よ来い：三菱の創始者岩崎弥太郎の生家前（写13）に昭和61年3月建立。

丸いお椀のような形の中に歌詞とメロディーと歌に出てくる桃の花が書かれたユニークな曲碑である（写14）。当初は上向きに設置されたが、雨水がたまるなどの理由で現在は立てて設置されている。遠くの山を見渡す田んぼの中の岩崎家の入口に岩崎弥太郎の迫力ある立像が建っている。



写真13 岩崎弥太郎の生家



写真14 春よ来い 曲碑

7) 叱られて：土居公民館前に昭和63年5月建立。

地元の方々の歌声が聞こえてくる公民館の前に本を開いた形の曲碑が建っている（写15）。左ページには、叱られてしょんぼり立つ女の子の姿が、地元出身の漫画家はらたいら氏によ



写真15 叱られて 曲碑



写真16 野村家屋敷

て描かれている。この辺りは、土居廓中と呼ばれ、土佐藩の家老の五藤家とその家臣の武家屋敷（写16）が保存されており、弘田家もここが地元である。落ち着いた武家屋敷群とれんげ畑の広がるのどかな風景の中で弘田も幼年期を過ごしたのであろう。

8) 鯉のぼり：溝ノ辺公園に平成2年10月建立。



写真17 野良時計

地元の地主が自ら西洋式の時計を作り村人に時刻を知らせた「野良時計」（写17）は、この辺りの名所であるが、その近くの溝ノ辺公園に設置されている（写18）。この歌は、作者不詳の文部省唱歌として扱われてきたが、躍動感にあふれるメロディーは、弘田が東京音楽学校の学生時代に作曲した。



写真18
鯉のぼり 曲碑

9) 金魚のひるね：江ノ川上公園に平成12年10月建立（写19）。



写真19 金魚のひるね 曲碑

国道55号線沿いに建つこの曲碑のそばには、岩崎弥太郎の銅像があったが、河川の拡幅工事のため生家附近に移設された。遠くからでも目立つ金魚の愛らしい姿の描かれた曲碑である。曲碑のそばには、「書碑」が建てられている（写20, 21, 22）。安芸のもう一つの顔、それは「書道の里」である。明治以降優れた書家を数多く輩出し、中でも手島三兄弟（手島右卿・高松慕真・南不乗）は、現代書道に大きな影響を及ぼし、末弟の南は、昭和57年に全国初の公立の安芸市立書道美術館の建設に尽力した。



写真20 手島右卿



写真21 高松慕真



写真22 南不乗

10) 靴が鳴る：駅前広場に平成17年10月建立。

安芸駅正面に、安芸市の紋章と並んで《靴が鳴る》の曲碑（写23）、駅前広場の中央には駅を背に手をつないで歌いながら一步を踏み出す子どもたちと傍らから嬉しそうに尾を振る子犬の石像が建っている（写24）。子どもの像は実際の小学生とほぼ同じ背丈に作られていて「童謡の里」を象徴する像である。

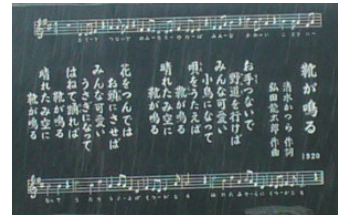


写真23 靴が鳴る 曲碑

第1号曲碑の建立から26年、ここに最後の建立となった。高知ライオンズクラブ結成30周年記念事業として川島三郎デザインで製作された。除幕式には、長年尽力された元観光協会会長の石坂道雄氏、弘田の孫で弘田の創設した「ゆかり文化幼稚園」の音楽主任須藤恵美氏も東京から駆けつけ、出席者全員で喜び合った記事と写真が、「弘田龍太郎の曲碑建立」「最後の靴が鳴る完成」「27年かけ活動」という見出しとともに、平成17年10月31日付の高知新聞に掲載されている。



写真24 靴が鳴る 像

(2) 安芸市立歴史民俗資料館

安芸城跡に昭和60年に誕生した。三菱グループの創始者岩崎弥太郎、翻訳小説や大衆文芸の普及に努め萬朝報（日刊新聞）を発刊した反骨のジャーナリスト黒岩涙香、衆議院議長を

務めた富田幸次郎、日本初のプラネタリウムの国産化に成功した五藤斉三らと並んで、弘田の多くの楽譜や記録写真、演奏会で着用した燕尾服や愛用のオルガンなどが展示されている。

(3) 安芸市観光協会と安芸商工会議所

－紙芝居とモニュメント－

安芸市観光協会の館内には、岩崎弥太郎・三菱グループと「弘田龍太郎ものがたり」の紙芝居（写真25）が展示されている。安芸に生まれ幼年時代を過ごした弘田が、故郷を後に音楽家として大成し亡くなるまでの物語が、計20枚近くの文章と水彩画で構成されており、紙芝居の終りには弘田の童謡をみんなで歌えるように歌詞と挿し絵も付いている。この



写真25 弘田龍太郎ものがたりの紙芝居
(安芸商工会議所女性会提供)

紙芝居は、平成24年、弘田龍太郎生誕120周年、安芸市制60周年に、安芸商工会議所女性会が20周年記念として制作し、5月10日に安芸市立土居小学校で披露された。現在も小学校に貸し出されるなど、教育現場で活用されている。制作にあたり安芸市立歴史民俗資料館の協力により、弘田の貴重な記録を後世に残し、童謡の里づくり運動が今日続いている。

観光協会の通路には《浜千鳥》《靴が鳴る》《お山のお猿》《叱られて》《雨》《雀の学校》《春よ来い》の7つの童謡を描いたタイルが埋め込まれ（写真26）、その横には童謡の作曲年とメ



写真26
童謡のタイルと右に童謡碑

ロディーを記したプレートがはめこまれた7つの童謡碑（写真27）が並び曲が流れてくる。安芸駅から南に延びる目抜き通りの歩道には、波と浜千鳥を組み合わせたモニュメントが置かれ（写真28）弘田を偲んでいる。



写真27 童謡碑



写真28
歩道のモニュメント

(4) 石坂道雄翁の童謡の里づくり運動と弘田龍太郎への思い

安芸市の童謡の里づくり運動については、「この人抜きには語れない」と云われる、元安芸市観光協会会長の石坂道雄翁を訪ねた（写真29）。88歳になられる翁は書家でもあり、仕事の傍ら子どもたちに書道の指導を行い書についての執筆もされている。今から40年前の童謡の里づくり運動について、曲碑にまつわるエピソードも加えながら熱く語られた。

昭和52年、当時の安芸市観光協会会長であった石坂翁は、「弘田龍太郎が残してくれた童

謡という何年たっても減びない遺産をみんなで大切にするために碑を建てよう」と呼びかけ、この熱意が「安芸市を訪れた人が安芸市の風物に触れられるよう彼の曲碑を市内名所に建立する」という活動に発展した。「歌碑」ではなく、楽譜も入った「曲碑」であったことを石坂翁は強調された。第1号曲碑は、広く親しまれている《浜千鳥》に決め、歌にふさわしい場所として大山岬に決めた。大山岬には、幕末の土佐の歌人鹿持雅澄（武市半平太の叔父）の詠んだ「秋風の福井の里に妹をおきて安芸の大山超え勝てぬかも」の歌碑があり以前から名所ではあったが、不便な場所であったため、浜千鳥公園を新たに作って浜千鳥曲碑を建立し、そこに歌碑を移した。浜千鳥曲碑を始めほとんどの曲碑の文字は、書家でもある石坂翁自らが書いた。そして曲碑を建立する活動が発端となり、前述の「童謡の里づくり運動」としての様々な活動につながるのである（写30）。当初、6、7基の建立を目標にしたものが、最終的には弘田の曲碑だけで10基も建立するという大事業になった。安芸市の曲碑の建立に始まる童謡の里づくり運動には県外からの関心も高く、見学に來られたり多くの協力も得られたという。

石坂翁は、観光協会の会長として「童謡による故郷の活性化を」という熱い思いで「童謡の里づくり運動」を始めたが、その中で、東京在住の弘田の妻百合子や娘たちとの交流はどのようなものであったのだろうか。「弘田の故郷安芸に弘田の童謡の曲碑を建てる運動」に対して、弘田の妻百合子は北原白秋を大変尊敬しており、「白秋の作詞した童謡を入れるなら」との条件で了承されたそうである。昭和57年、4基目の北原白秋作詞の《雨》の除幕式に、弘田の長女藤田妙子氏が出席され、それ以降は最後の第10基の曲碑にいたるまで除幕式には必ず弘田家から参列された。地元と石坂翁の熱意が伝わったものと思われる。そして、弘田に関する資料が弘田家から寄せられ、協力が得られたのである。

弘田は、土佐の「よさこい節」を初めて採譜、楽譜化し、それが、ペギー葉山の歌った「南国土佐を後にして」につながり、現在のよさこい節の発展になった。また、弘田は木曾節の採譜も行っている。百合子の父親は詩人高安月郊であり、月郊と藤村との交友や藤村と弘田との出会いから、藤村の「千曲川旅情の歌」に弘田が作曲するに至った。弘田は旧制津中学、旧制高校（弘前・浦和・高知・浪速）や旧制広島高等師範等多くの学校の校歌や学生歌を作曲している。また、軍国主義の時代には、戦意高揚の曲の作曲を依頼されることもあったと思われるが、弘田はそれを好まず発表することもなかったという。上記の様々な事柄は、弘田家との交流の中で石坂翁の知るところとなり、それらの弘田に関する知識や情報は石坂翁の中に蓄積された。



写真29 石坂道雄翁



写真30
曲碑が掲載された会報誌

昭和34年に弘田の妻百合子氏が編者代表となり、遺族と作曲家松村禎三氏によって編集された全3巻からなる「弘田龍太郎作品集」を出版した。その貴重な初版楽譜が昭和53年5月に百合子氏から石坂翁に贈呈されている。この年の4月に安芸市の「童謡の里づくり運動」が始まった。里づくり運動がおこるまでに弘田家と石坂翁の間に信頼関係が少しずつ築かれていったことが推察される。また、平成18年に自費出版された「私の12、13歳の時の外国旅行日記」は、弘田のドイツ留学に同行した次女瑠璃子の日記を瑠璃子の娘が本にまとめたもので、親しい関係者のみに贈呈された大変貴重な記録である。これらの楽譜や本の中にはメモや書き込みが随所に見られ、弘田をより深く理解したいと思う石坂翁の気持ちが表れている。石坂翁は、弘田の創設した東京のゆかり文化幼稚園へも訪問し、丹下健三氏の設計した園舎や自由表現をする子どもたちの生き生きとした姿に直に接し、感銘を受けている。

このように、1個人の動きが、単なる「童謡による地域おこし」にとどまらず、弘田を偲ぶ地元の運動へと発展し今日まで様々な形で続いているのは、石坂翁の情熱と童謡に対する純粋な思い、そして何よりも地元出身の作曲家弘田龍太郎への大いなる敬意と誇りがその根底にあるからであり、その果たした役割は大変大きいと思われる。

V おわりに

今回、曲碑巡りをはじめ様々な場所を訪ね、童謡の里づくり運動の大変貴重な話を伺うことができた。安芸の落ち着いた穏やかな雰囲気は、この土地が旧くから産業・経済・文化が発展し、江戸時代にはそれらに加え、教育に力を注ぎ多くの有能な人物を輩出してきたという歴史を感じる。父から受け継いだ高い教養と教育者としての資質や、一絃琴の名手であった母から受け継いだ音楽的才能が、幼年期をすごした安芸の文化的風土と相俟って弘田が生まれ育ったのだと思われる。「弘田の童謡を伝えていこう」という活動は、平成24年の弘田の生誕120年記念の紙芝居の制作まで実に34年に及び現在も続いている。地元の人々のこのような熱い思いに心打たれ、弘田の童謡の持つ魅力と普遍性をあらためて強く感じた。

あとがき

筆者は東京都台東区谷中の弘田の墓を訪ねた。弘田家の墓は、山岡鉄舟や三遊亭円朝で知られる臨済宗全生庵にあり、平成元年春、弘田の遺族により《叱られて》の曲碑が設置された（写31）。平成14年3月、台東区教育委員会により、「弘田龍太郎墓・曲碑」の案内板が全生庵の入口に設置され、名所の一つになっている。



写真31
弘田家の墓
(右手前に曲碑)

曲碑の下に記された、作曲家松村禎三氏による弘田への敬愛の情に溢れる撰文が、弘田を偲んでいる。

弘田龍太郎 昭和27年 文京区本郷の自宅にて没、ここに眠る。
彼は、大正・昭和にかけて、器楽曲、オペラ、舞踊曲等活発な作曲活動をしたが中でも千数百曲におよぶ歌曲と童謡の作曲は彼の代表的な仕事となった。
彼のうたは人の心の最も自然な息吹きであり、その瑞々しさは風雪をこえて些かも色褪せることはない。数多くの曲が発表当時から国民的な規模で愛唱されつづけ、日本人の心の原風景の中に光を孕んだ風のように棲みつづけるものとなった。「千曲川旅情のうた」「叱られて」等の歌曲、「春よ来い」「靴が鳴る」等の童謡は最も人口に膾炙（かいしゃ）された傑作である。

謝辞

本論文の執筆にあたり、安芸市立歴史民俗資料館には、弘田龍太郎の資料・遺品を拝観させていただき、元安芸市観光協会会長石坂道雄翁、並びに安芸商工会議所女性会においては、貴重な資料を提供していただき、童謡の里づくり運動についての貴重な話を伺うことができました。また、弘田龍太郎の写真については、ゆかり文化幼稚園長藤田厚生氏（龍太郎の孫）のご協力により安芸市立歴史民俗資料館より提供していただきました。ここに深甚なる謝意を表します。

文献

- 安芸市史編纂委員会（1980）：安芸市史歴史編，pp.9-17.
安芸市史編纂事務局（1981）：安芸市史資料編，pp.158-160，pp.223-257，pp.276-284.
安芸商工会議所女性会（2012）：弘田龍太郎ものがたり（紙芝居）
秋山真理子（2013）：作曲家弘田龍太郎と童謡（幼児教育学科FD研究発表）
秋山真理子（2016）：童謡を歌いましょう（笠岡市民大学教養講座）
秋山真理子（2017）：幼児期における表現教育－ゆかり文化幼稚園を訪問して 就実教育実践研究第10巻 pp.153-164
大地宏子（2012）：童謡作家、弘田龍太郎の幼児教育，鶴見大学紀要 第49号 pp.9-16
印牧季雄・弘田龍太郎（1928）：童謡遊戯 落葉の踊り，京文社
上笙一郎編（2005）：日本童謡事典，東京堂出版
金田一春彦（1995）：童謡・唱歌の世界，教育出版
高知県人名事典新版刊行委員会編（1999）：高知県人名事典，高知新聞社.
小島美子（2004）：日本童謡音楽史，第一書房
周東美材（2015）：童謡の近代，岩波現代全書.
畑中圭一（1997）：文芸としての童謡，世界思想社.
畑中圭一（2007）：日本の童謡 誕生から九〇年の歩み，平凡社.
弘田龍太郎（1936）：作曲の初歩，岩本書店.
弘田瑠璃子（2006）：私の12.13歳の時の外国旅行日記

(父弘田龍太郎とすごしたドイツ・ベルリン1928-29)，偕出版。

藤田圭雄（1977） 解題戦後日本童謡年表，東京書籍。

読売新聞文化部（1999）編：唱歌・童謡ものがたり，岩波書店。

全国大学音楽教育学会（2013）編著：日本の子どもの歌 唱歌童謡140年の歩み，

音楽之友社。

日本童謡協会（1985）編：日本の童謡200，音楽之友社。

弘田龍太郎作品集 1 ～ 3 （1959），音楽之友社。

藤田圭雄・阪田寛夫・中田喜直・湯山昭（1997）監修：日本童謡唱歌大系(I)明治～昭和前期，
東京書籍。

森澤郁夫監修（2009）：子どものための歌—弘田龍太郎作品集，創風社。